（第3種郵便物認可）　2023年（令和5年）3月11日（土曜日）　讀賣新聞

犬の障害走 飼い主も疾走

ただいま活動中

生活犬環境向上推進協会（狭山市）

「むつごろうちゃん、いつもより速く走っています！」。狭山市の入間川沿いの貸しグラウンドに実況中継の声が響く。

軽快に飛び出した犬の「むつごろう」は、ずらりと並んだ高さ約15センチのハードル20個を次々に跳び越え、猛スピードで約70メートル先のゴールに向かって疾走していった。

2月12日に開かれた交流会での一コマだ。「エクストリーム」と呼ばれるドッグスポーツ向けのトレーニングで、ハードルを跳び越える「ハイスピード」と、急斜面やトンネルなど約80メートルの障害コースを走る「総合」の2種類の競技を行う。雨天時や夏場を除き毎月1回のペースで開かれており、この日は約10匹の犬が飼い主と共に、何回もタイム更新に挑戦していた。

スタート地点とゴール地点には、感知センサーを取り付け、タイムが自動測定される本格的な環境を整えている。

犬と触れ合う理事長の土金さん（中央）ら、運営スタッフ（2月12日、狭山市で）

障害物を乗り越えるよう、愛犬に指示を送る飼い主

【こんな団体】理事長の土金さんの呼び掛けで、2006年に発足した。「生活犬」とは、家族の一員として生活を共にしている犬を指す造語で、同協会が商標登録している。

犬のマナー向上を通じて、地域の環境改善を目指す。犬の散歩を兼ねた「見回りパトロール」も行っている。

詳細はホームページ（http://www.green.dti.ne.jp/aipc/）へ。

メスのシェットランド・シープドッグ「ハル」（3歳）と参加した春日部市の会社員斉藤浩さん　は「昨年までのハイスピードの記録を更新し、12秒55のベストタイムを出すことができた」と満足げだった。

競技では、指示を出す飼い主も愛犬とともにコースを懸命に走り回る。実況中継のアナウンサー役も務めている理事長の土金英利さんは「飼い主も愛犬と一緒に体を鍛えることができる」と説明する。

犬たちが競技に参加するには、飼い主に呼ばれたらすぐに戻ってくる「呼び戻し」を完璧にマスターしているなど、一定の条件をクリアしていなければならない。「総合」競技ではリード（引き綱）を外す必要があり、犬が競技場外へ逃げだしてしまわないようにするためだ。

参加するだけでも時間をかけてしつける必要があるが、練習の先には地区大会、さらに全国決勝大会という晴れ舞台が待っており、参加者たちは出場を目指して全力を傾ける。

斉藤さんとハルは、これまでに地区大会が開かれた新潟と愛知、静岡の3県を回って出場したが、全国決勝大会への出場は果たせていない。「次こそは」と意気込み、日々の鍛錬に取り組んでいる。

マナーしつける教室も

交流会では、障害物走のドッグスポーツとは別に、愛犬のマナーを向上させる体験教室も開いている。

この日は、民間施設で警察犬の訓練を担当したこともある新井哲雄理事らドッグトレーナー2人が、約10組の飼い主と愛犬を対象に、トレーニングを行った。

「呼び戻し」のほか、飼い主の隣を一緒に歩いたり、座ったままおとなしく待ったりする練習を行った。新井さんは、「教え通りにできた時は心から褒めたり、おやつをあげたりして」と、動作を覚えさせるコツを伝えていた。

メスのミニチュア・シュナウザーの「ポンズ」（3歳）と何度も参加している狭山市の滝島久子さん　は「生まれた時は、かみつきや無駄ぼえがあり、周りに迷惑をかけると思っていたが、トレーニングのおかげで直すことができた」と喜んでいた。

（市川憲司）